

宮田直彦のエリオット波動レポート

マーケット見通し(短期アップデート) 7 月 28 日 10:05AM 更新

[日経平均・TOPIX]

【当面の想定レンジ】(日経平均) 50,500～73,500 円
(TOPIX) 3400～4180

[NY ダウ・S&P500]

【当面の想定レンジ】(NY ダウ) 45,000～53,300 ドル
(S&P500) 6300～7700

[ナスダック 100]

【当面の想定レンジ】(ナスダック 100) 23,500～30,800
(ナスダック総合) 20,700～27,200

[米ドル/円]

【当面の想定レンジ】 140.000～165.000 円

[ドルインデックス(ドル指数)]

【当面の想定レンジ】 98.000～102.720

エリオット波動とは

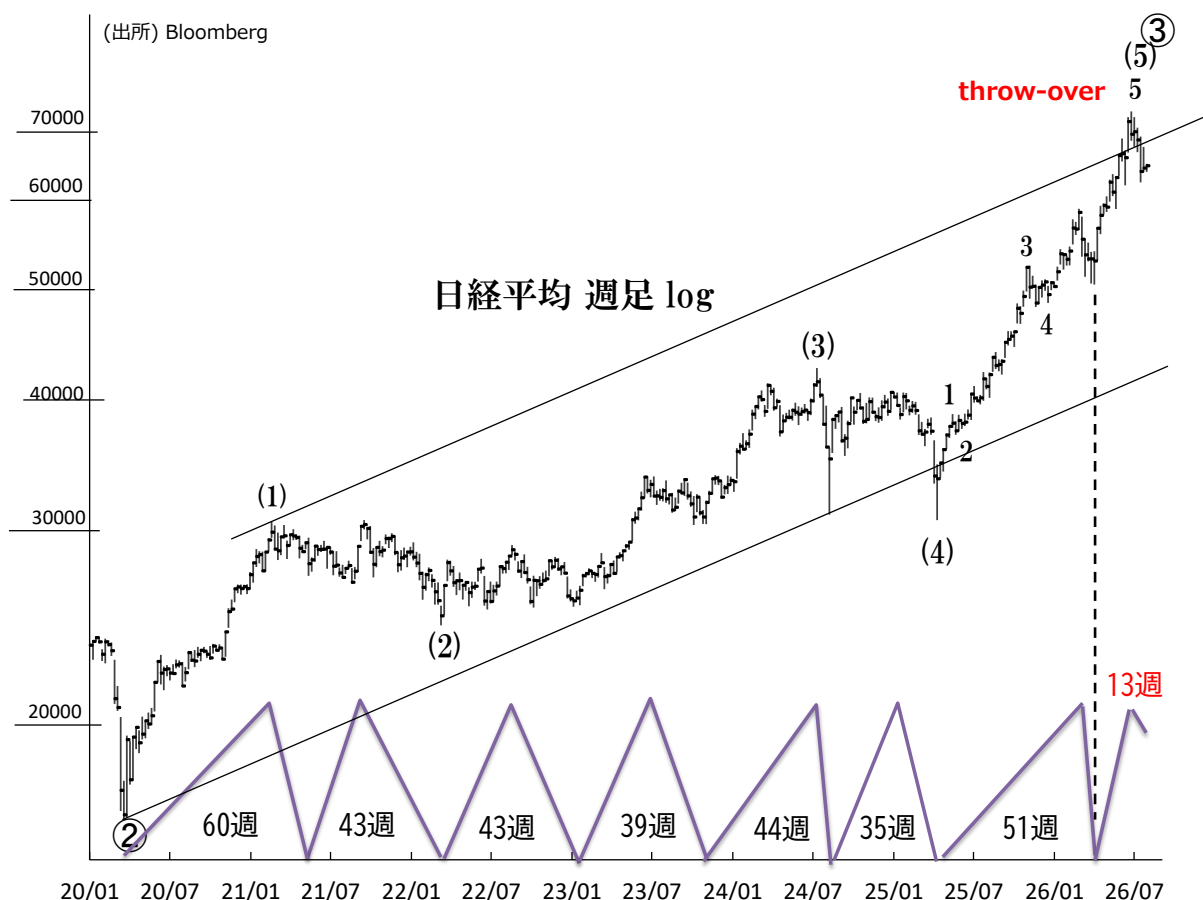
株式・為替動向を予想する心強いテクニカル手法

米国人ラルフ・ネルソン・エリオットが提唱した、今後の株式や為替など市場価格の動向を予想する手法です。相場は 5 つの上昇波と 3 つの下降波（合計 8 つの波）で一つの周期を作るパターンに従って展開するとされます。

このパターンは集団心理によるもので、数分から数十年といった様々な時間軸において観察されます。

フィボナッチ数列、黄金分割比率をチャート分析に初めて導入したのもエリオットです。

日経平均・TOPIX



【週足 エリオット波動分析】

72,831 円(6/22)はプライマリー第③波の天井とみられ、そうであれば、プライマリー第④波の弱気相場が始まったことになります。

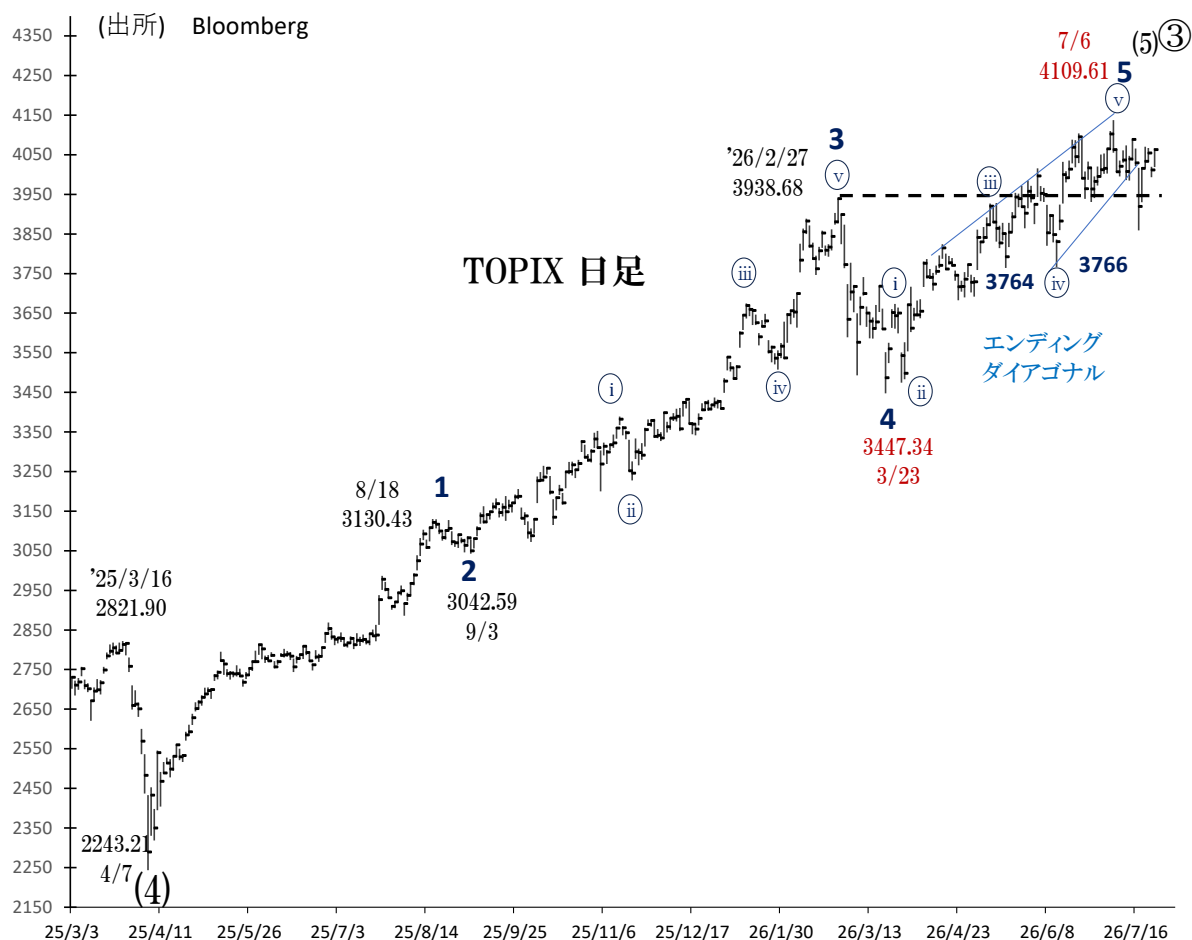
今年 3 月 31 日安値(50,558 円)以来の現行週次サイクルは、弱気相場に特有の「レフト・トランスレーション(右肩下がり)」になる公算が大きい(つまり上昇期間よりも下げ期間が長くなります)。今サイクルの上昇期間はフィボナッチ 13 週(両端入れ)の長さでした。サイクル全体が 37 週～53 週(※1)ということから、6 月 22 日(サイクルトップ)からの通算下げ期間は、24 週～40 週(5 カ月～8 カ月)と推定されます。

換言すると、日経平均は今年 11 月～来年 3 月まで下値模索の展開が続くと予想されます。7 月 17 日に一時 62,704 円まで下げましたが、この時点で高値からの下げ率は 13.9%です(※2)

通常「レフト・トランスレーション」のパターンは、サイクル終点安値はサイクル始点安値を下回ります。つまり、少なくとも 50,558 円を下回らないことには現行サイクルは終わらないでしょう。

(※1)週次サイクル期間(2020 年以降の補正後)は 45 週±8 週(37 週～53 週)。

(※2)サイクルの高値から安値まで、下げ率は 10%～26%(平均 17%)。

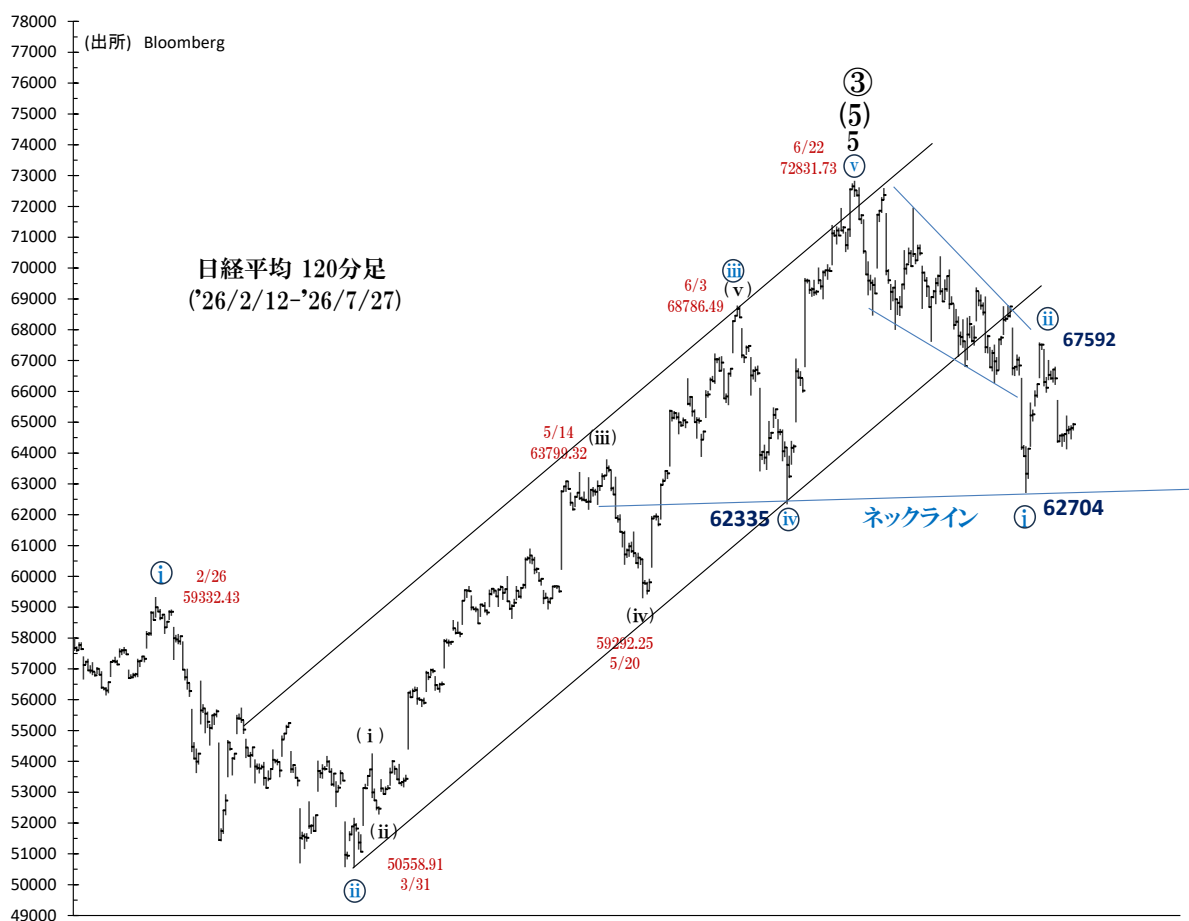


[TOPIX]

7月6日に最高値を付けてからも一日経平均とは対照的に一なお最高値圏にとどまっています。昨年4月以降で値がさ株への過度な集中投資が続いた反動で、今回は日経平均がTOPIXに先行して弱気相場に入りました。

TOPIXには高値更新の可能性がまだ残されているようです。もっとも、3月安値からの第5波「エンディング・ダイアゴナル」が天井パターンであることに変わりはありません。プライマリー④波入りは遠い話ではありません。

プライマリー④波の調整規模は、プライマリー第②波(2018年1月～20年3月)の下げ率(37.2%)と同等か、それ以上の大きさになると思われます。それでも予想される日経平均の下落スケールよりは、浅めといえるかもしれません。



[日経平均]

72,831 円(6/22 高値)から 62,704 円(7/17 安値)まで、通算下げ幅は 1 万円を超え(1 万 127 円)、下げ率は 13.9%に広がりました。この大きな下落すべてがマイニュート級のマル i 波であり、そこからはマル ii 波によるリバウンドに位置付けられます。

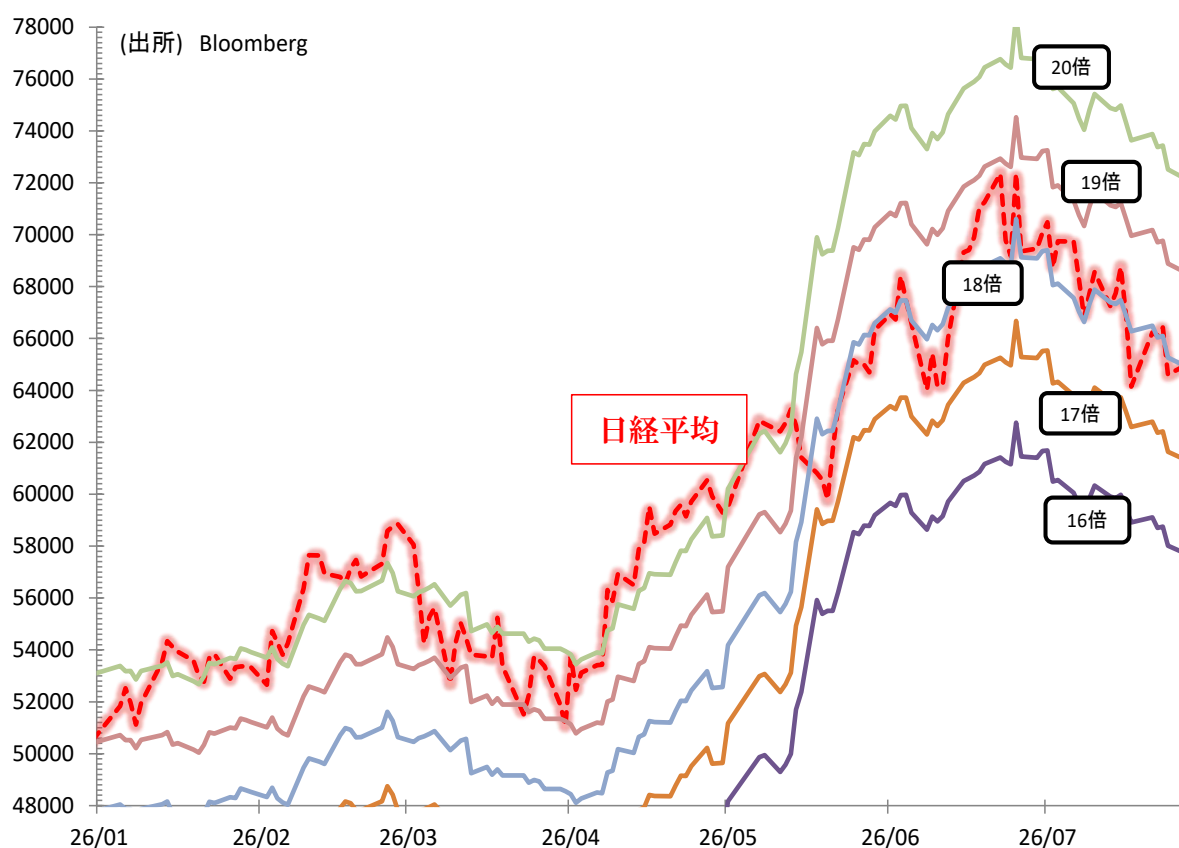
67,592 円(7/22 高値)はマル i 波のほぼ半値戻り水準[67,768 円]に相当しています。マル ii 波のリバウンドは終わった可能性があります、そうだとすると今週から来週は、マル iii 波による強力な下落がありそうです(62,704 円を割ると三尊パターンから下放れ、下げは一段と加速するでしょう)。上述のようにマル i 波は約 1 万円の下げでした。したがってマル iii 波の下げ幅は、通算で 1 万円～1.6 万円になるでしょう。

信用評価損益率が急悪化、1 年 3 カ月ぶり低水準(7 月 17 日時点)

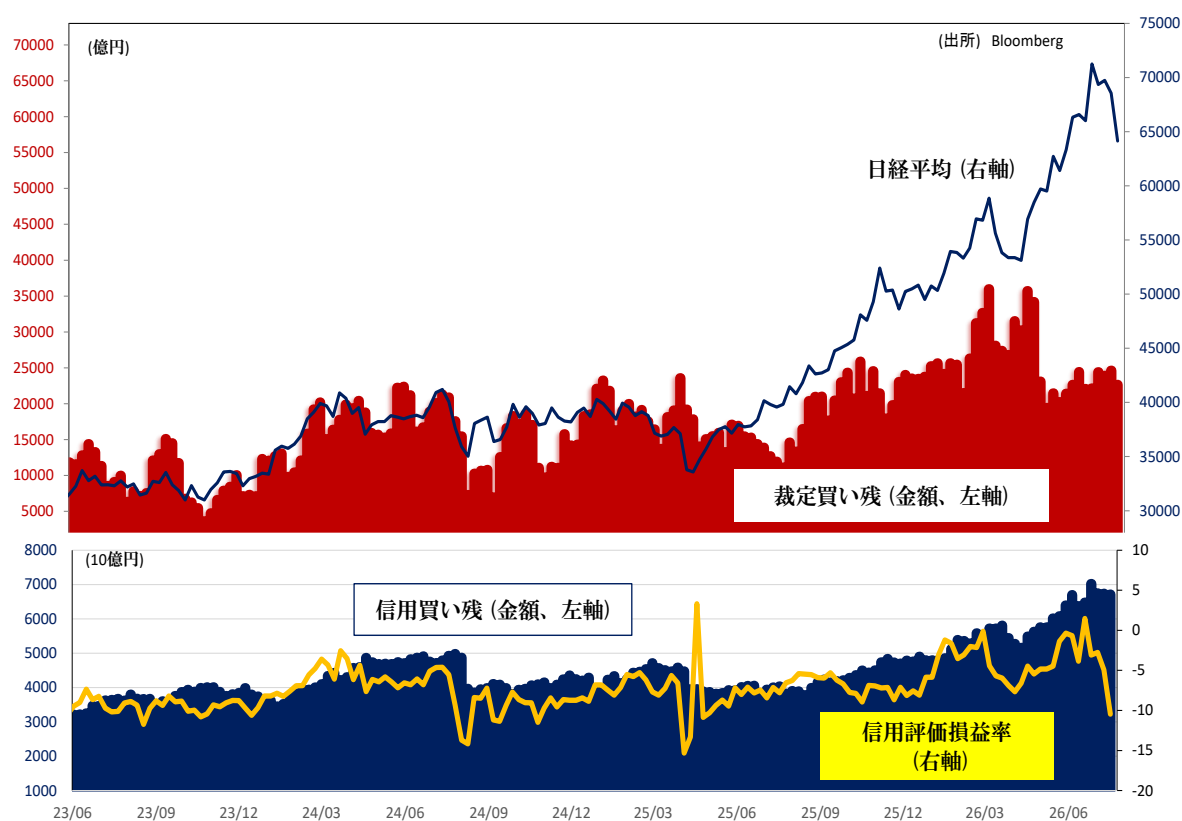
評価損益率はマイナス 10.45%と 2 週連続悪化、25 年 4 月 25 日時点(マイナス 10.87%)以来の低水準になりました。この週(13～17 日)の日経平均は 4416 円(6.44%)下げ、レバレッジ買いをしていた個人投資家の含み損が拡大しました。買い残はまだ 7 兆円近く(6 兆 7097 億円)もあり、買い残整理には時間が必要です。

[予想 PER 別の日経平均水準]

7 月 27 日の日経平均予想 PER は 17.99 倍、予想 EPS は 3609 円でした。過去最高の予想 EPS・3922 円(6/25)から低下傾向にあります。



[裁定買い残と信用買い残] (7月17日時点)



NY ダウ・S&P500

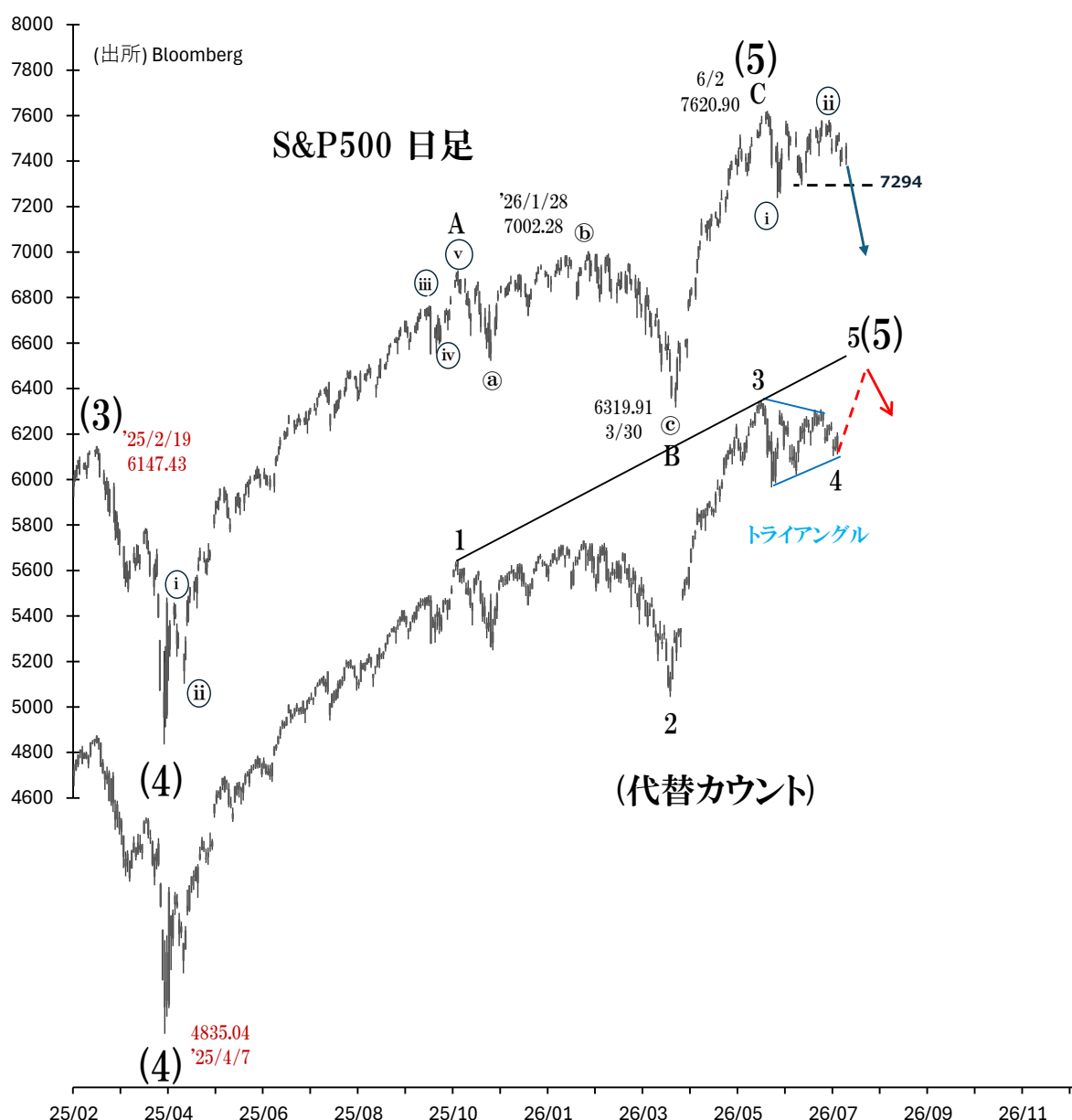


【NY ダウ 30 日足 エリオット波動分析】

NY ダウ 30 は 7 月 7 日に最高値(53,289ドル)を付け、一方 S&P500 の最高値(7620)は 6 月 2 日です。これら指数は「未確認」の天井パターンを継続中です。

3 月からの上昇 C 波は、マル i 波～マル v 波から成る上昇「拡大ウェッジ」とみられます。この弱気パターンが完成した可能性が高まっています。

7 月 23 日は一時 51,542ドルへ下げました。目先 51,301ドル(6/23 安値)を割ると、それは下落基調を一段と強めるきっかけになりそうです。



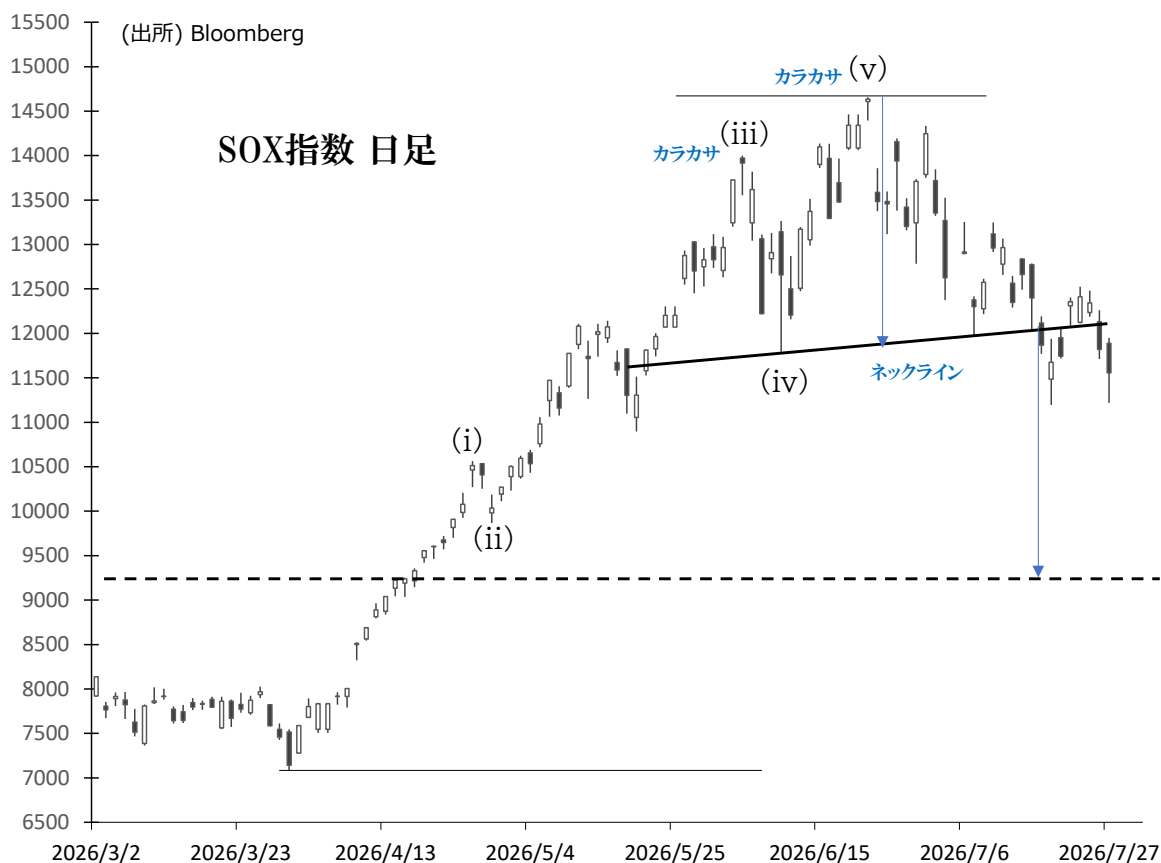
【S&P500 日足 エリオット波動分析】

6月2日の7620が天井だった場合、既にマル iii 波の下落がスタートしていることになります。7294を割るとマル iii 波入りが濃厚となり、より本格的な調整に入ることでしょう。

(代替カウント) 7294を維持する限り、第4波がトライアングルを形成している可能性が残っています。この場合は、上昇・第5波が控えています。この「最後の上昇」により、強気相場のすべてが完了するでしょう。

SOX 指数

7月27日の下落によって、6月来の下落における最低の終値を示現しました。これで終値ベースでも高値からの下げ率は21.04%に拡大し、「弱気相場」入りはより鮮明です。三尊パターンからの垂直計算から導かれる下値メドは9300-9500です。



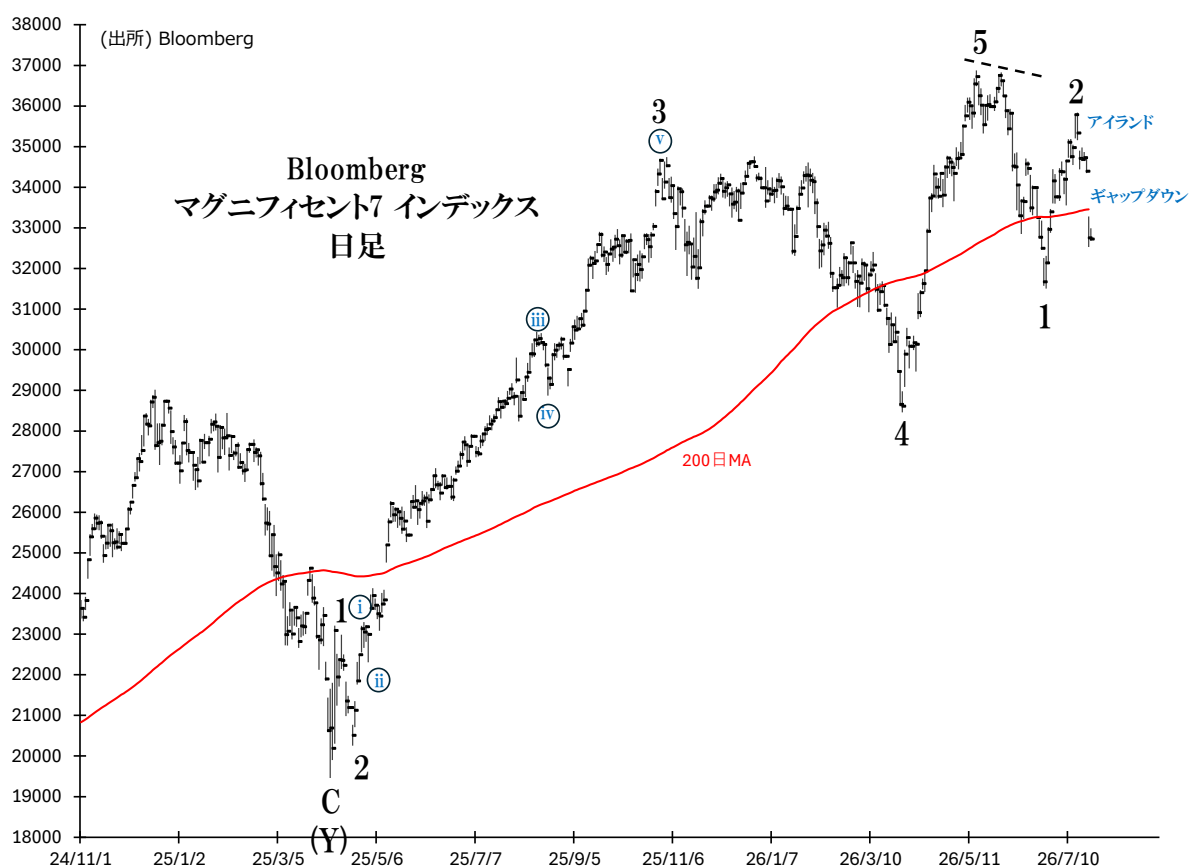
Bloomberg マグニフィセント7 インデックス

この指数は5月14日に最高値を付けました。マグ7は他の主要指数より先行して高値を付けており、これは重要な天井パターン(未確認)です。

7月16日の高値は、5月14日高値-6月26日安値の下げに対し78.6%戻しの水準でした。

翌17日にはマドを空けて下げ、ここに「アイランド・リバーサル」転換パターンが示現しました。そして23日は大きくギャップダウンし、200日MAを明確に下抜いています。

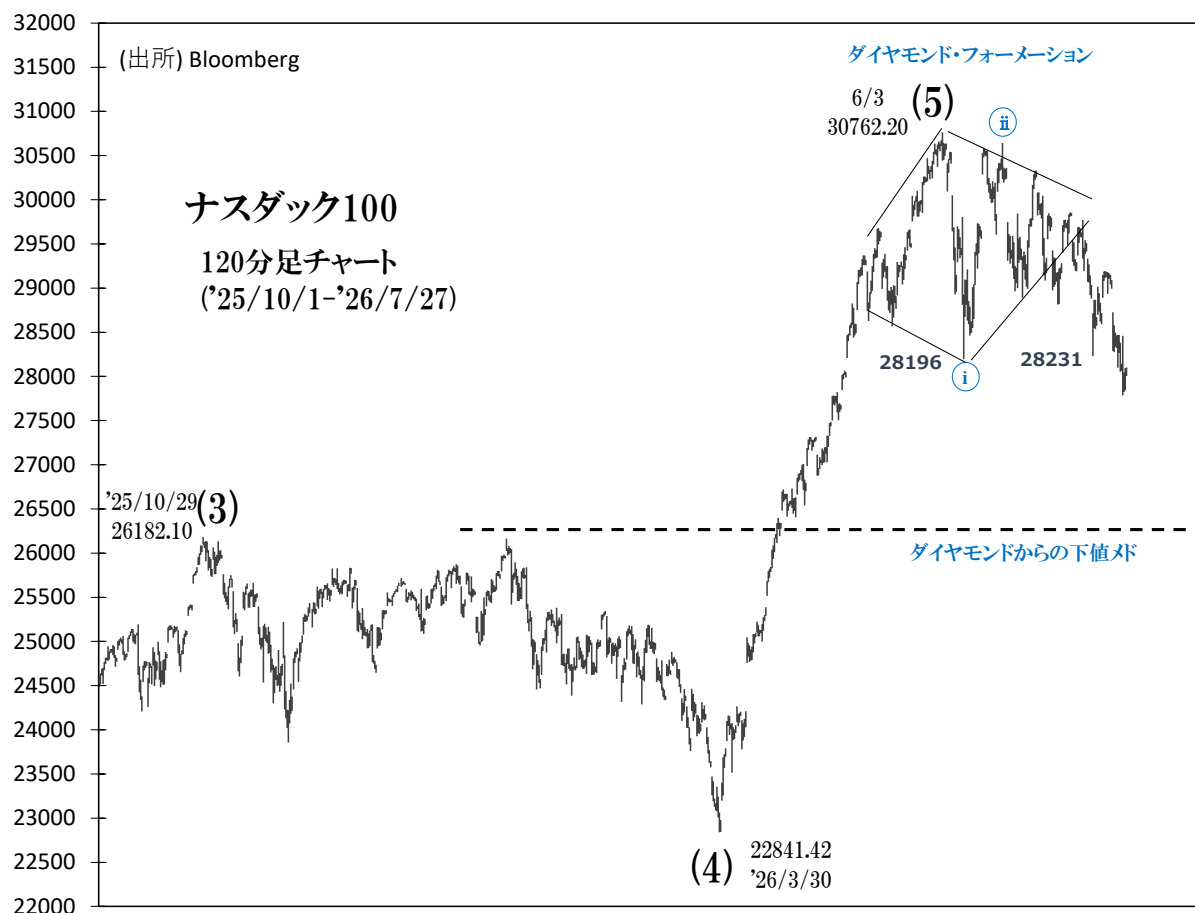
これらは下落インパルス波(第3波)のスタートを示唆しており、この見方通りなら、マグ7は3月末安値へ早々に下振れるでしょう。



[ダウ輸送株平均]



ナスダック 100



【ナスダック 100 時間足 エリオット波動分析】

過去 1 年間の天井パターン「ダイヤモンド・フォーメーション」から下放れの展開となっています。

今のところダイヤモンドからの垂直計算値は[26,250]です(7 月 27 日は一時 27,786 まで下げました)。

足元はマイニユート級マル iii 波の下落とみられます。この見方によれば、マル iii 波の長さはマル i 波(2566 ポイント下落)の 1.618 倍(4152 ポイント)程度と見込まれます。計算するとマル iii 波の下値ターゲットは[26,492]となりますが、それはダイヤモンドからの下値メドに近いものです。

米ドル/円



【月足・エリオット波動分析】

二通りの有力波動カウントが存在します。いずれも米ドル/円(以下ドル/円)上昇の終焉が近いことと、円高スタートの接近を暗示しています。

[波動カウント 1]

22 年 10 月からの(B)波「トライアングル」を完成後、25 年 4 月からは(C)波の上昇にあります。(C)波完成を以て 2011 年来のダブル・ジグザグ(W-X-Y)は完成し、その後は、大きな下落(ドル安・円高)を迎えることになります。

[波動カウント 2]

21 年からの(Y)波は、波動間の重なりが目立つ(A)-(B)-(C)-(D)-(E)のウェッジ・パターンを描いています。足元は(E)波の上昇にあり、それはいつ終わってもおかしくありません。

日米実質金利差から導かれる米ドル/円の水準は、現在 1 ドル=142 円程度です。既に日本円は 1 年以上も、金利差からの妥当な水準より極端に過小評価され続けています。

購買力平価からの妥当な円相場は OECD 算出の GDP ベースで 1 ドル=97 円~103 円です。長期的にも日本円は著しく過小評価されています。

「円安バブル」の崩壊は、円キャリー取引の巻き戻し(円買い戻し)によって引き起こされるでしょう。



【日足 エリオット波動分析】

25 年 4 月(139.877 円)からの上昇(C)波は、(C)波は 5 つの波(1~5)で構成されます。154.983 円(5/6)からは第 5 波とカウントしています。

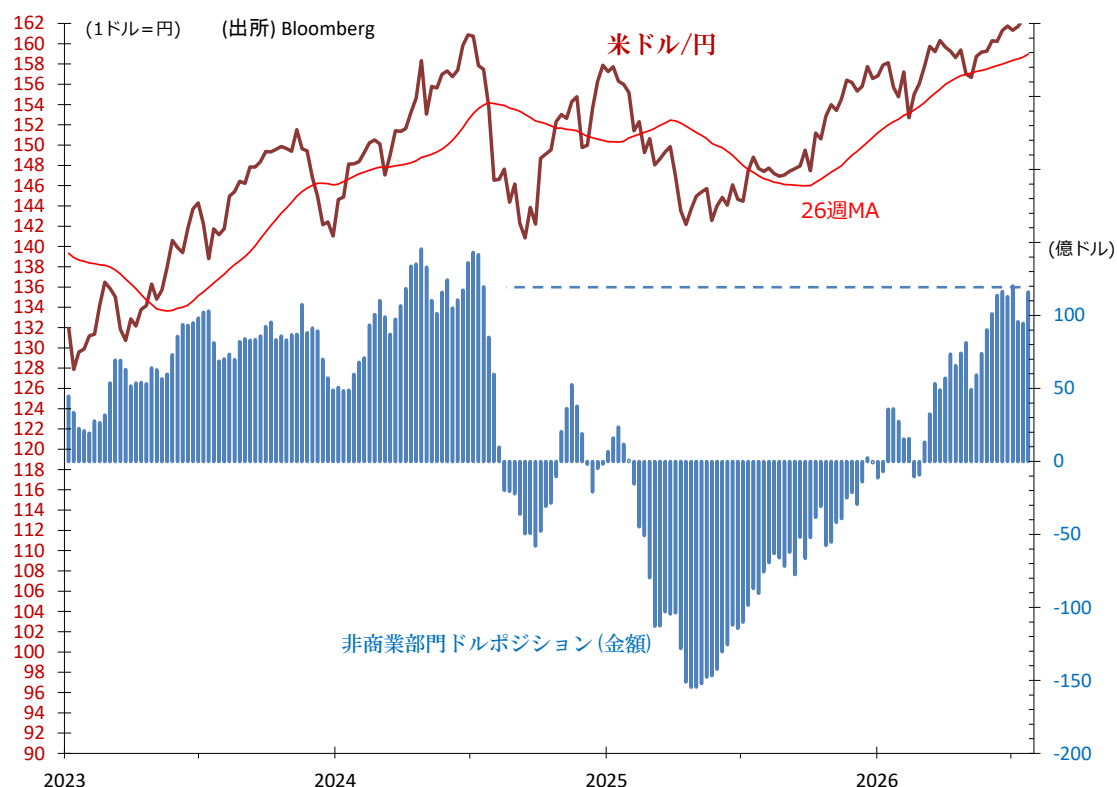
7 月は高値圏で「ミニ・トライアングル」を形成していましたが、それを上抜き、39 年 7 カ月ぶり円安となりました。

足元は 164 円に近い水準ですが、上昇(C)波における、第 1 波と第 5 波が等しく上がる水準[163.716 円]を既に達成しています。ドル/円がピークを付ける可能性に注目しています。高値圏でのトライアングルに続く上昇は多くの場合、短期間にとどまる傾向があります。

一方、今後「持続的なドル高」の予見可能性が高まるようなら、ドル/円のさらなる上振れシナリオを考慮する必要があるでしょう。

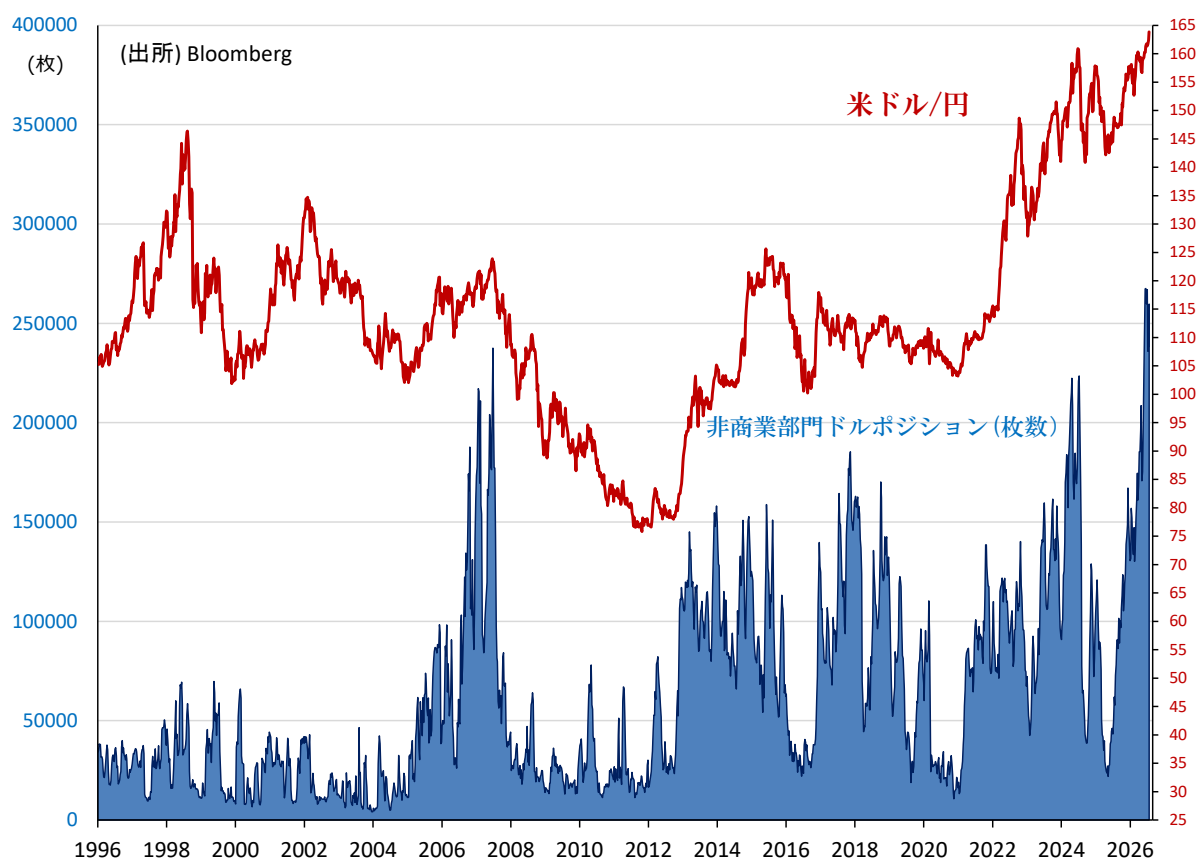
金利差からのドル/円推計値

足元、日米実質金利差からのドル/円推計値は[142.283 円]です。



円売り持ち高が3週ぶり拡大 (2026年7月21日時点)

IMM 通貨先物市場において、投機筋(非商業部門)の円売り持ち高は、前週の 96.69 億ドルから 116.50 億ドルへ、3 週ぶりに拡大しました。



円売り枚数は再拡大

7月24日時点の投機筋の円売り持ち枚数は25万9715枚。前週(23万8628枚)より拡大し、過去最高(26万7507枚)に近づきました。

ドルインデックス (ドル指数)



【エリオット波動分析】

22 年 9 月高値からのドル安③波は、「トリプル・ジグザグ(W)-(X)-(Y)-(X)-(Z)」のコースを辿っているとみられます。

今年 1 月安値からのドル高は、③波中の(X)波であり、それが終わると、次は 3 番目のジグザグ(Z)波が展開されていく、と思われます。

6 月 24 日に付けた高値(101.800)は、ターゲットの[101.138-102.717]内で付けており、それを以て(X)波が終わるかを引き続き注目です。

なお 101.800 を上回る場合は、[101.977-102.896]を打診する展開が予想されます。

投機筋のドル合成ポジションの買い持ち高は再び拡大

投機筋によるドル合成ポジション買い持ち枚数は、7 月 21 日時点で 47 万 3669 枚へ拡大し、6 月 30 日時点の 45 万 5948 枚を上回る過去最大を記録しました。



※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。また、相場の行方を保証するものではありません。お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できると思われる各種情報源から入手したものです。当社はその正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。

当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもありますが、お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引における取引手数料は無料です。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差（スプレッド）があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4% 以上です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率（為替リスク想定比率）を基に当社が算出した証拠金率を乗じた金額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率（為替リスク想定比率）は変動いたします。店頭 CFD 取引に必要な証拠金額は、取引総代金の 10% です。

金融商品取引業 関東財務局長（金商）第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会
株式会社マネースクエア